

大嘗おおにえの祭り

國學院大學助教授

岡田莊司

本日は、あと一か月後の十一月二十二日、二十三日に齋行が予定されている大嘗祭についてお話をさせていただきます。昔でありますれば、十月の下旬には御禊ごけいの行幸が行われ、そして、十一月の初めからは忌みに入る。祭りを前に日々浄化していく大事な時期であろうかと思えます。

大嘗祭は中世は節会、いわゆる現在のの大饗を含めまして、大嘗会だいじょうえという言い方のほうが多かったようでありまして、平安時代から近世までは大嘗祭という言い方はあまりしません。ただ、お祭りの中心的なところを大嘗祭と書いてある場合があります。

今日のテーマを「大嘗おおにえの祭り」といたしましたのも、実は最近刊行した本の題目とかかわっています。大嘗祭の何々とか、大嘗祭の世界とか、皆さんそういう書名をつけられているので、つける書名がなくなっていました。そこで日本古来の和訓の読み方というか、伝統的な「ニヒナへ」から来た「オホニへ」ということで、『大嘗の祭り』という書名にさせていただきました。今日お話すテーマも、大嘗の祭りという伝統的な雰囲気醸し出すような内容を中心にさせていただきたいと思えます。

この明治聖徳記念学会というのは、學術団体としては大正元年につくられました、非常に名譽ある学会であります。すでに大正三年三月に第九回の研究会で和田英松先生が「大嘗祭に就て」という優れた講演をされています。これが翌年の大正四年四月の明治聖徳記念学会の紀要の三巻目に載っておりますが、私が申し上げようとすることは、このなかですでに明確に言われているのです。

さらに、大嘗祭が行われましたのは、大正四年の十一月ですが、その翌年には柳田国男先生がやはり明治聖徳記念学会の第五巻の紀要に「御大札参列感話」という題で収載されています。当時柳田先生は大札使事務官のお役をしていたわけでした、御大札に参列したときの感動やら感想にふれておられます。そして、非常に謙虚に、御大典が終わってから数か月もたたないうちに、このように客観的なことで歴史的に取り扱って私が話するのは早きに過ぎるように入りますと言っているわけです。

それに比べますと、実は私はまだ大嘗祭も始まっていない前にそういう話をこの明治聖徳記念学会ですということとは、よけいに早きに過ぎるといふ気持ちでおります。

そして、昭和の御大典のときには、佐伯有義先生がやはり「大嘗祭の精神」という題目で講演をされています。当時はかなりたくさん研究会をやっていたようで、百四十六回目の研究会の講演録が、明治聖徳記念学会紀要の第三十巻目に載っております。昭和三年の秋に刊行されております。

こういう形で大正の御大典および昭和の御大典、二度にわたる御大典にあたって、明治聖徳記念学会は講演筆記録をちゃんと残しているわけです。昭和十八年以降、最近まで、明治聖徳記念学会としては中断がありました。和田英松先生、あるいは柳田国男先生、そして佐伯有義先生といった先人の有名な研究者がすでにすっかりとしたご研究をされているわけです。ですから、実は私の話すようなことはあまりないわけで、こういう先生方のおっしゃっていることを後追いつているということ、ご理解いただきたいと思います。

皇位継承儀礼としての大嘗祭はご承知のとおり、踐祚があり、そして即位の儀があり、大嘗祭、さらに大嘗祭のあとに節会にあたる大饗があり、ついで、御親謁というところで行われております。古くは主に踐祚、即位、大嘗祭という三つの大きな皇位継承儀礼をとり行うことによって、天皇陛下の新天地としての儀礼が完了する。そういう意味では大嘗祭が最後の皇位継承儀礼の大きな儀式であったのです。

同時に、毎年の新嘗祭を大きくしたものですから、最初の新嘗祭という性格があります。大嘗祭は二つの側面をもっています、一つは皇位継承儀礼としては最後の儀礼であります、もう一つの側面としては、毎年の新嘗祭の最初の新嘗祭であります。そうしますと、平成の時代の最初のまつりごとを齎行するのが大嘗祭であります。平成の時代は、国家が安康であり、また国民が繁栄し平和であるようにという祈願を込めてのまつりごとです。毎年、新嘗祭として行われるわけですけれども、その最初のまつりごとでもあるという二つの性格があります。

皇位を嗣ぎ、踐祚をして、そして、天津日嗣を継がれた天皇陛下が、公の場で諒闇後御即位の礼を行う。これによって国民（および海外）に向かって皇位継承されたことを公に宣する。このことによって、すでに天皇になられ、天皇陛下としての御位は確たるものになっているわけですが、その天皇陛下が行うまつりごと、天皇陛下しか行えない祭りとして、つまり、日本国の祭祀権者としてまつりごとを行う。これが大嘗祭であろうと思うのです。

大嘗祭の祭儀の内容については、昭和以降、そしてこの十年、二十年來がとくにそうなのですが、折口先生の真床覆衾論を初めとして、いろいろな研究者が聖婚儀礼説とか、あるいは先帝遺骸同衾説といった、さまざまな臆測を神座のなかで行われると論じてきたのが、大嘗祭の研究の主流的な方向づけであったと思います。

大嘗祭を研究するということは、非常に重い大事なことです。重層的な、大化改新以前の古い新嘗儀礼、そこに含まれる大嘗祭の本義的なもの、さらに平安時代以降の節会、饗宴にあたるようなさまざま要素を組み込んでいる。祭りというのは非常に重層性があるわけです。重層的なものであり、広い視野も必要で、それをやれば大嘗祭だ

けで一生かかってしまう。

大嘗祭について本格的にやるには一生かかる重い仕事であると思つて、今まで避けて通つてきたということが私の気持ちの本当のところです。

主に平安時代、中世の記録を読むのが私の趣味でして、別に何を勉強しよう、ということではなく、ただただ資料をひもといていくことに一つの喜びを感じているのが日々の私の生活の一片です。

平安時代、鎌倉時代、室町時代、日記がかなり活字になって手元にあります。そういう日記を見ましても、詳しく式次第、所作等が記録されているような内容がたくさんあるわけですが、そういうものにも一つも八重畳を置いた神座でのご所作が何もないことに疑念をもったのが最初です。

そこで、いくつかの資料等をあたってみましても、たとえば、私が数年来やっていたのは、吉田神道の研究なのですが、その吉田卜部の人が大嘗祭のときには外陣げじんのところにおります。宮主といい、吉田卜部氏の当主あるいはその息子が奉仕する例が多いのですが、その宮主が次にどうするようになるということを采女に指図したりするわけですから、だいたいの内陣の様子等も知っています。

卜部兼豊が書きました南北朝時代の『宮主秘事口伝』という本があります。それにも「大嘗会は神饌の供進第一の大事なり、秘事なり」とありまして、これが「秘事」であるということしか書かれていません。平安・鎌倉時代以降の記録を見ましても、「秘事口伝」なりとして出てくるのは、みんな神饌供進なのです。そうすると、神饌供進と共食の儀礼、天皇御自らが天照大神をお迎えして対座されて、お食事を差し上げる。そして、御自らが御飯ごひと白酒しろき、黒酒くろきをいただくという供進・共食儀礼こそがいちばん大事なまつりごとの中心儀礼ではないかと思つたわけです。

そのそばにあります神座というのは、何かの用途にはなっていないはずですが、ここに天皇御自らが入られて、何かの所作をやり、あるいは聖婚儀礼を行うとか、そういうことは少なくとも私が研究している文献史学の上ではあ

りえないことであると確信を持つようになりました。そこで、折口説は少なくとも文献実証の上からは成り立たないであろうということ論じ、いまでもそう思っております。

こういう側面で見えていましたら、和田英松先生、柳田国男先生も同様なことを仰っているわけです。たとえば、大正三年に和田先生が明治聖徳記念学会の紀要に書かれておりますなかで、

「大嘗宮は陛下が御先祖の天照大神を御招待になる所であります」

「その内院に寶座を設ける。寶座には一丈二尺の畳を敷いて」

と細かいことを書いていますけれども、その上に八重畳というものを敷きます。その畳の上に坂枕という枕を置きます。「つまり神様の御寢床です」

とはっきり書いています。つまり天照大神を招待して、お休みになれる寢床です。そして、

「南の方の側には、神様の御召物を置き、其足の方には御靴を置く。」

それから、その外に御帯と書いてあります。これはおそらく打払布ではないかと思えます。それから、御櫛などもとりそろえてあります。

「全く神様を御迎へ申す訳です。其側に陛下の御座があつて少し斜めになって居る。其処で自ら御祭りになり、陛下も聞召す。」

つまり、共食をされるということです。

このように、大正時代には私の考えと全く一致することが書かれているわけです。

柳田先生も昭和二十八年に、これは折口信夫先生が亡くなった年ですが、にひなめ研究会の第一篇に書かれた「稲の産屋」という論文のなかに、このようなことを書いておられます。折口信夫と柳田国男は仲がよかったというか、

折口先生は柳田先生を師と仰いでいたわけですが、折口先生が論じた真床覆衾論について柳田は全くふれていません。

稲の問題と絡めて、

「この大嘗の日の神殿の奥に、迎へたまふ大神はただ一座、それも御褥御枕を備へ、御杵・杖（これは柳田国男先生の間違いだと思ひます）等を用意して、祭儀の中心を為すものは神と君と、同時の御食事をなされる。寧ろ単純素朴に過ぎたとも思はれる行事であつた」と書いております。

これは神祭りの本義としてはびつたりするのではないか。単純素朴な祭りであるということ、この言葉に尽きているのではないかと感じとっているわけです。したがひまして、私が『國學院雜誌』に書いていろいろな面で反響を呼んだその論文の最後に、

「まことに厳肅素朴な天皇一代一度のまつりごとというべきであろう」

と書いてきました。この「厳肅素朴」という意味は、柳田学を踏襲して、単純素朴にすぎたとも思われる祭りであつたという意味を継承した形で最後に入れたわけです。

ただ、いろいろな反論があつて、最近でもある若手の思想家が、平板で貧しい内容であるということを書かれていたりするわけです。しかし、それは祭りの意味を理解されていないためです。あまりにも日本と諸外国の王権儀礼を對比した戦後の学問研究に乗りかかった形での意味づけであります。つまり、王権論における王の権威の付与とか、そういう側面のみを強調してきた最近までの研究動向が頭に幻想として残っているからです。

私の考えは和田英松先生や柳田先生と変わらないのですが、昭和五十年代、六十年代にかけての神秘主義やオカルトブームを信奉してしまつたと、それでは物足りない。平板すぎるということになるわけです。直接私にいろいろ聞きにくる人でも、それじゃ物足りないという言い方をされますが、祭りの本義というのは、どろどろして呪術的なものがあるかという、日本の古来伝統的な祭りにはないのではないのでしょうか。

もしそういうものがあれば、神仏習合のように合流したものと残っていたりするのではないか。陰陽道の祓い祈禱をしたり、星祭りをやったり、仏教儀礼の密教にそういうものがあつたりしても、日本の伝統的な神祭りのなかには、いわゆる秘儀と言われるようなものではなくて、要は大切なまつりごとは口外しない、そして人前に見せないというこの二つに尽きるのではないでしょうか。「秘儀」という用語自体も新しいものようです。

そういう面ではそれを大事に守ってきているのは伊勢の神宮さんです。もちろん、ほかの神社のお社もそうだと思います。そして、とくに神様に差し上げる御神饌については、明治祭式ではだいたいこれとこれとこれということを決まっています。長い伝統的な特殊神饌等は、われわれが調査に行っても、つくっていると見せないといいこと、その内容を口外しない。また、見せないことにまつりごとの大きな意味が含まれているわけです。ですから、批判される方は、神祭りの本義的なものを理解していないからではないかと思っております。

したがって、第一には大嘗祭の大事なところは神饌の御供進である。共食儀礼であるということになります。ですから膳屋における神饌の準備、女官奉仕による稲舂の儀などは、聖別されたなかで最も大切な儀式でしょう。

もう一つ私の反論、批判点としてあげておきますと、聖婚儀礼説や先帝遺骸同衾説等がありますけれども、これでは同じ儀式を二回繰り返すことの説明がつかないわけです。真床覆衾論もそうです。なぜ二回も同じ儀式をやらなくてはいけないのか。天皇御自らが中央の御神座に入られて、真床覆衾をかぶられて物忌みされるという形でやられる。あるいは、聖婚儀礼説があるとすれば、それが二度も同じことを繰り返す意味、その証明、解決が全くつかないのです。その点で最近、角川書店から出されました鳥越憲三郎さんの本には、本来は大嘗宮は一殿で、大嘗宮の儀式も一回しか行われていなかった。それが清和天皇のときに、摂政である藤原良房が清和天皇の権威をつけるために、わざわざ二回つくったのだという趣旨のことが書かれております。これは全く誤りでして、平城宮の発掘調査跡では中心点から東に悠紀院が出ていますから、それと対称的に見れば、当然西に主基院があることは確かです。悠紀、主基と

いう二か国を卜定しているのは天武朝から記録に残されていますから、こういった論は全く論外であると思います。なぜ二回繰り返すのか。昔はだいたい悠紀の儀が夜の九時ぐらいから十一時か十一時半ぐらいまで、主基の儀が三時ごろから五時ぐらいまでということ、ちゃんと夕御饌ゆのみけと暁御饌あけのみけ、早くいえば夕食と朝食と書かれているわけです。これは天照大神をお迎えして、神聖ななかにも神聖につくられた御神膳を差し上げ、またそれを共食する。それによって神様も霊を増し、皇祖天照大神の霊をいただくことで、天皇祭祀をとり行うというのが本義であろう。したがって、二度繰り返すという説明が、従来の説ではなかなかつかられないというのが実情ではないかと思えます。もう一つ言いますと、秘事というのは神膳供進・共食ですが、もう一つは「御告文」、天皇陛下御自らが神に奏する祝詞がいちばん大事なものであらうと思えます。

『國學院雜誌』が明治三十二年に刊行されて、ちょうど今年の七月で千号目を数えました。通巻千号記念号として「大嘗祭の諸問題」という五百数十ページの厚い特集号が出されています。そこでとくに奈良大学の松前健先生から私の論の何か所かを批判していただきました。そのなかに、秘儀があったのではないかと想定される資料を引いておられます。それは後醍醐天皇の『建武年中行事』です。これは年中行事とありますように、毎年の年中の行事について後醍醐天皇自らが書かれたものです。そのなかに、いまは残されていませんけれども、神今食じんこんじきといって六月と十二月に天皇親祭のお祭りがありました。そのお祭りは新嘗祭、大嘗祭とも類似する祭りです。

神今食について、神饌の供進を書いたあと、「その後、いささかご祈念のことあり。果ててのちまたお手水さきのごとし」とあります。大嘗祭の天皇のお祭りでは最初と最後にお手水を行いますけれども、そのあとに「なほ秘事どもはしるすに及ばず」ということが書かれております。

松前先生はこの秘事を重視しまして、その前に神饌供進のことが書かれているので、この秘事はそれ以外の秘事ではないかと想定されて、神座のなかで何かやはりあるのではないかということの一つの証拠として挙げているわけです。

しかし、その前文に「いささかご祈念のことあり」とありますから、私はこれにかかってくるかと理解しております。「いささかご祈念のことあり」、それが秘事である。つまり天皇御自らが「御告文」を読まれるという所作が秘事である。ただ、これがいつごろから始まったのか。とくに大嘗祭において「御告文」が最初からあったのか。実は古いところには載っていません。現在の儀式次第を見えますと、神饌の供進があり、その後「御告文」があり、最後に共食儀礼があるということで、神饌供進と共食の間に「御告文」を読むということがあるわけです。しかし、これは儀式としては整備された形でしょう。

古い時代は紙もないですから、心のなかで祈念する形しかなかったと思いますが、それでも平安時代後期ぐらいになりますと、記録としてそういうものが出てくるのかもしれない。そして、それを具体的に示したのが、後鳥羽上皇が一二二二年の順徳天皇の大嘗祭のときに、わざわざ順徳天皇に大嘗祭のときに読む「申詞」を伝授している記録です。

そこに書かれている言葉は、「このこと最も秘蔵のことなり。代々このこと諸家の記にのせず、また知る人なきか。ことに秘蔵することなり」とあります。神饌の供進、共食については、『江家次第』、『江記』等、あるいは、今回宮内庁書陵部から刊行されました崇徳天皇大嘗祭の記録のなかでも、あらあらのことはわかるのですが、「御告文」にあたるものはそれ以前には残されていません。ここではっきりと「知る人なきか。ことに秘蔵することなり」と出てきます。そうしますと、これこそが神饌供進、共食とともに、中世以降はいちばん大事な秘事として先帝から新帝へ伝えられていく内容であったらこうと考えます。

ご承知のとおり、祝詞というのは、一度使ったら焼却するということで、絶対に見せない。神と人、神と天皇の間で交わされるものですから、焼却か土に埋めてしまうということで、ほとんど古い時代の祝詞文は残されていません。それと同様のことでして、「御告文」こそが秘中の秘ということで、神膳供進・共食の細かい所作、および「御告文」

については公にしないのが、伝統的な公家社会の考え方ではなかったか。後鳥羽上皇が新帝順徳天皇に伝えるために、とくに伝授したということで、たまたま後鳥羽上皇の日記が残っていたために、こういうことがわかるわけです。

そのなかで書かれているのは、国中平安、年穀豊年です。国内が平和であって、一年間の実りが豊かであるようにということをお祈念することが趣旨ですから、まさに毎年の新嘗祭と内容的にも変わらないと思います。

そういうことで、松前先生のご批判の一つについては、必ずしも当たってはいないということでもあります。

それから、文献上、記録の上で中央の神座における秘儀がないということをお、私が発表して以来、これはマスコミの取材での見解ですから、ちゃんとした見解かどうかわかりませんが、そういうものを見えますと、平安時代、中世以降はなくなってしまったんだと。これは山折哲雄先生も松前健先生もおっしゃっていることですし、岡田精司先生も同様にコメントされている。しかし、昔はあったんだという説が、まだまだ残っているわけです。

文献史学、文献考証学の面では、少なくとも平安時代までは記録に残されていないのですから、ないとしか言いがたないわけですが、それ以前はあったんだと言われると、私も実は困ってしまうわけです。ただ、その言い方も、どの時代からということになると、松前先生や山折先生なんかも言っているのは、天武、持統朝からは形骸化してなくなつた。このように書いています。松前先生は先の『國學院雜誌』の千号で、「真床追衾の儀もしだいに圧縮化、象徴化され、最後には岡田（莊）の言うような、単なる神靈安居のための象徴物として、神座に置かれるだけとなり、神饌供進のみが秘儀として強調されるようになったのであろう」と述べられて、結論的には、私の言っている説に同調しているわけです。したがって、その後現在までの大嘗祭は私見のようにそう見てもよろしかろう、ただ、古くは違ふのだと。ここが意見の分かれるところです。

天武、持統朝以前まではあったのだけれども、天武・持統天皇朝から変わったのだということをお松前先生なんかは言っています。それから、この間の『月刊ASAHI』における対談では山折先生も述べられていたと思います。し

かし、大嘗祭が始まったのは、定説、通説は天武、持統朝です。天武、持統朝から変わった、岡田の言うようになっていたことだとすと、私は大嘗祭論をやっているのですから、大嘗祭における儀式の内容は天武、持統朝からは変わっていないということを、むしろ反対する人たちも認めてくれたことになる。ですから、大嘗祭は天武、持統朝以来変わっていないということを認めてもらったことになります。

では、それ以前はどうだったか。これ以前は大嘗祭とは言わずに、単に新嘗と言っていたわけですね。この新嘗は天皇家祭祀としての新嘗もありましたし、また皇子や大臣たちも行う、あるいは豪族層も行うというふうな、民間の習俗儀礼としての新嘗でもありました。各地方地方で、関東地方では『常陸国風土記』にも出てきますし、『万葉集』にも出てきますし、新嘗儀礼はかなり幅広く秋の収穫儀礼として、そして、それは祖霊を祭る儀礼であったかもしれません。二重性があったと思いますが、各地に残され、また、天皇の新嘗儀礼も行われていった。

そして、この場合には、大嘗祭が畿外の国郡卜定による公の田んぼの新穀の稲を用いて行ったのに対して、大化改新以前の古い時代の新嘗儀礼は、纏向遺跡の時代、つまり三世紀の後半ぐらいから、大和の御田（屯田）と言われる天皇の直轄地からとれたお米を用いて行う。この大和の御田こそが天照大神が天^{アメノミコ} 邑^{ムラノキ} 君につくらせた田んぼを、地上世界に移したものであって、その地上世界の田んぼでとれた収穫物を用いて神に捧げる。これもまた本来的には単純素朴な儀礼であった。その儀礼の延長線上に大嘗祭があるということですから、それ以前には秘儀はあったのだという論は実証性がないのです。岡田精司先生や松前先生は何十年も研究されていて、その道の大家ですから気持ちにはわかるのですが、やはり実証できないということが難点ではないでしょうか。さまざまな傍証を引用されていますが、なかなか決め手にはなっていない。とすれば学問的客観性を重視する立場からは認められないだろうと思っております。

そういうことで、単純素朴だけがあるようですけれども、もちろんまつりごとの意味として、皇位継承された天皇

陛下が祭祀権者として神祭りを行う。皇祖天照大神をスメミマノミコトである天皇陛下がまつりごとを行えるということ、それ以外の者が祭りを行うことはできなかった。

今回は十一月二十二日の夜半に天照大神と初めて対面されるわけです。この場所は宮殿の天皇の住まいする場所が本来の場所だと思えます。昔は歴代天皇遷宮制といひまして、一代ごとに都を替わる。その都替わりごとに皇祖霊をお迎えして、これからの将来の平安を祈るといふのが本義であろうと思ひますから、自分の住まいする宮殿にお迎えする。そして、最高のもてなしを行つて、まつりごとを行う。

しかし、陛下ご自身は大忌おほみの御湯、さらに小忌おほみの御湯とだんだんと聖性化されていきますけれども、聖性化されていくごとに装束も簡素なものに替えられていく。初めは帛の御袍で練絹の御袍ですが、天照大神をお迎えしてのお祭りは御祭服といひまして、粗雑につくられた荒っぽい絹織物の装束をつけられる。天皇御自らは天照大神に対して、こういう言い方はちょっと語弊があるかもしれませんが、民間習俗儀礼と対比すれば、迎える側の家の主人的な立場で迎える、招待する、おもてなしすることになるのではないかと思ひれます。

もちろん、建物等も簡素なつくりが本義ですし、神饌を盛りつける器物も、カシワの木というのは日本国中どこでも生育しており、それによつてつくられた枚手ひらで、窪手くぼででもてなす。しかし、もてなす御神饌は最高のものを奉るといふことで、神聖な聖別された稲の御飯、また、鮑等々の海産物、と最高のものを差し上げてもてなす。

そして、建物内の畳というのも江戸時代から、大嘗宮の神殿のなか全面にわたつて敷かれております。下のほうも畳ですし、横の壁にあたるところも近江表の畳ですし、天井も近江表です。なかに入れば相当においがきついのではないかと思ひますが、古くは下は真竹の簀子の上に藁を敷いただけの簡素なものでした。そして、神の御神座には蘭草の畳が用いられる。蘭草の畳は正倉院にも残されていますけれども、奈良時代以前から非常に貴重品でして、平安時代の絵巻物を見ましても、尊い人が寝る場所だけに薄い畳が敷かれています。食事をする場所等は板敷きでした。

大嘗祭の御神殿のなかの内陣のなかに置かれる畳も、本来は中央の神座だけは畳で、畳というのは休まれる場所であつたのではないかと。

そういうふう到大嘗宮の設営、設備、あるいは、それに奉納されるあぢふえ繒服、にぎたえ鹿服の織物等、すべて簡素素朴なものを
用いて奉仕して行ふ。それはやはり、『日本書紀』の神話、『古事記』神話にちゃんと記された天照大神の宝鏡開始の
段のところにあります天岩戸隠れの前段で、御田を耕し、また織物を織っているときに、スサノオノミコトが乱行を
するというところや、あるいは、ゆにわ斎庭の稲穂の神勅という天孫降臨とかかわつての神勅というところにあります。

よく『日本書紀』のどの段が大嘗祭の反映であると特定するのですが、私はそういう見方はとっていません。むしろ、大嘗祭に書かれている儀式の全体が、『日本書紀』や『古事記』の各神話の部分／＼に凝縮されているといつてもいいわけです。まつりごとがその神話とじかにこの段はこれにあたるというふうには、調べてみても無理があるのではないかと。神話伝承の神話が凝縮された形で大嘗祭に語られているのではないかと思っております。

私が考えている大嘗祭についての論、そして最近、私に対する批判に対しての反批判的なことをお話しして、また、そのことがすでに大正以前からずっと和田英松先生をはじめとして言われていることであるし、古くは室町時代の一条兼良が『代始和抄』でも言っているように、公家社会に共通した認識として、まつりごとは人前に見せず口外しないということが伝統的な祭りの本義である。中央における神座の秘儀説というのは、文献的な資料から解釈するかぎりにはこれはないだろうと考えているしだいです。

あと一か月、十一月二十二日、二十三日は大嘗祭の日、物忌して、まつりごとが肅々と静かに進められることを願っております。静寂にまつりごとが斎行され、そして、平成の時代が平安で、国民みんなが幸せであれということをお祈りしていただける神聖なひとときを、心静かに過ごしたいと思っております。